

# 狼の爪



中山 聖子 もりのこずえ 絵

「ろうそう、ですか？」

首をかしげて母さんが聞いた。診察台の上で伏せをしている茶色い子犬は、不安そうにぼくを見上げる。

「そうです、狼の爪と書いてろうそう。犬はふつう前足に五本、うしろ足に四本の指があるんですが、この子はうしろ足の指が一本ずつ多いでしょう？これが狼爪なんです」

波木先生は、右手で子犬を抱きよせ、左手でうしろ足をとって見せてくれた。先生のゴツゴツとした手にのせられた子犬の丸っこい足には、たしかに五本目の指がある。

「あら、ほんとう。トモキは気づいとった？」

母さんに聞かれて、ぼくは首をふった。初めて飼う犬の健康診断で、指の数が多いと言われるなんて思っていないのか。というか、犬の指が何本かなんて考えたこともない。

それって、小三として恥ずかしいことなのだろうか。

「こうして、退化したはずの指が生えてくる必要があるんです。めずらしいことじゃないし、とくに気にする必要はありませんが、何かに引っかかりたり巻き爪になったりしてケガをしやすいんで、気をつけてあげてください」

波木先生が手をはなすと、子犬は毛糸玉みたいな体をブルブルとふるわせた。それから先生は、大きな両手で子犬を包むように抱くと、ぼくの胸にわたしてくれた。

「ほかは問題ないよ。かわいくて、ええ犬じゃね」

腕の中で、五センチほどのしっぽがピコピコ動いた。くすぐったくて、じんわりとあったかかった。

子犬は一週間ほど前に、近所のさんぽ屋さんからもらってきた。そこで飼われている、柴犬みたいな雑種が赤ちゃ